

あっ! そうだ

ツマグロヒョウモンの謎

岡崎市城北保育園（愛知県岡崎市）

[5歳児]

<事前の様子> 園庭にあるピオラのプランターで、数人が十数匹の毛虫のような幼虫を見つけ、「これ、何だろう!」と興味をもって図鑑を持ち出し調べる。その様子に他児も集まって来て、手に乗せてじっくり観察し始める。図鑑の中に同じ幼虫を見つけて「あった、これだ、これだ! ツマグロヒョウモンだって!」と大興奮する。「これ、飼いたい!」というみんなの声により、クラスで飼育することになる。

	子どもの様子	援助(♡) 読み取り(※)
サナギになった 違いを感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・20匹以上のツマグロヒョウモンの幼虫を飼育して10日後頃、5匹の幼虫がサナギになる。家で飼育しているアゲハチョウとは違い、木の枝にぶら下がるような格好を見て、「なんか違う。面白い」「ミノムシみたい」と食い入るように観察する。そんな時A児が「このサナギ、金色のプツプツが付いてる」と発見する。「本当た、金色に光ってる!」「でも、白色にも見えるよ」「何で付いているの? アゲハには無いよ」と騒ぎ出し、互いに自分の知識を話し、確認し合う姿が見られた。  <ul style="list-style-type: none"> ・飼育していた幼虫が次々とサナギになっていく中で、一匹のぶら下がっている幼虫が激しく動きだした。いつもと違う動きを見て最初は「体操しているみたい、ほら1、2、1、2」「グルグル回って目が回らないのかなあ」と面白がっていたが、幼虫が皮を脱いでサナギに変身しようとしているとわかり、子どもたちは声を静め、じっと見入るようになった。そして、子どもも保育者も初めて見る感動的な“幼虫が皮を脱いだ瞬間”「あっ!」と声をあげた。 	<ul style="list-style-type: none"> ※ただ観察している時と違い、過去の経験や自分の家で飼育している他の幼虫での経験と比較してツマグロヒョウモンを観察することで、新たな発見ができた。 ♡発見や疑問を比較だけで終わらせず、“なぜ、付いているのか”“なぜ、金色をしているのか”を考え、調べていくことで、子どもの“知りたい気持ち”を満たしていきたい。 ※今まで、幼虫、サナギと結果だけを観察していたので、脱皮の瞬間を直接見たことは感動的で貴重な体験だった。「すごいね」とつぶやく子どもの心に、生き物の成長の素晴らしさを刻み込むことができたのではないか。それ以来、子どもたちが飼育ケースを覗く機会が多くなった。
蝶になった 命を感じる	<ul style="list-style-type: none"> ・登園してきたB児が、飼育ケースの中の蝶を発見!大喜びで登園してくる子一人ひとりに「ツマグロヒョウモンが蝶になったよ!」と知らせる。B児は幼虫を見つけて以来、毎日飼育ケースを覗き変化を観察していたので、とても嬉しそうである。ツマグロヒョウモンの観察に熱心な数人が集まると、「こっちの蝶は目が黄色」「あっちは目が×(バツ)みたいだ!」「触角の先は丸いよ!」とそれぞれ発見したことを言葉にし、伝え合いながら確認する。 ・その時、「ねえ、この赤いのは何?」と飼育ケースについた赤い汚れにみんなの目が集中した。「血が出たんじゃないの?」と心配する。“血”という言葉にみんなの顔が急にこわばり、飼育ケースに人だかりができた。心配そうに覗き込むみんなの中でB児だけは、「これは、幼虫の時に体にあったオレンジ色が溶けて出てきたんじゃないのかなあ」とつぶやいた。 ・次々と蝶になっていく中で、2匹だけ羽が曲がりたり底に着いたまま乾いたりして飛べない。飛べないが羽を、時折パタパタさせる蝶を見て、「かわいそう…」「上手く飛べないんだ」「だって、羽が曲がってるもん」と心を痛めていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ※B児は毎日ツマグロヒョウモンを観察していたので、蝶になった時の感動は人一倍であっただろう。 ※ただ単純に喜ぶだけでなく、すぐに赤い汚れに注目し、B児なりに一つの答えを考え出すところは、「今までの経過をしっかりと見ていて思いついた」ものだと思われる。 ※羽化した時、羽が飼育ケースの底にくっついたまま曲がりたり乾いたりした2匹の飛べない蝶に注目している。 ♡その後、蝶の絵を描く機会や、子どもの疑問「サナギに付いていたキラキラ(金色)は何?」「蝶になる時の赤い(赤い汚れ)は何?」について、図書館に行ったり蝶博士に手紙を出したりして調べる機会をもてるように援助する。

ポイント

幼虫を見つけた時から、子どもたちは知っている幼虫と違うという意識や「何かの幼虫?」という感性をもっています。そのため、細やかに観察をしていることが言葉での表現に現れ、クラスで共有されている様子がわかります。こうして観察や幼虫への思いが深まっているので、羽化場面で命を感じる体験の質が高く、思いを巡らす様子や表現から、「科学する心」が育まれていることを把握できます。